

第 17 回日本在宅医学会もりおか大会 一般・指定演題

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	多死社会を支えるための地域づくり ～診々連携を通じた在宅医療支援体制の構築の試み
演者名	佐々木淳、高田哲也、竹森康夫、後藤裕史、田仲一欽
所属	悠翔会在宅クリニック

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		9

目的
遠くない将来「看取り難民」が年 50 万人近く発生すると予想されている。来るべき多死社会に向けて、在宅看取りを増やすことは解の一つとなり得るが、現状その大部分は一部の在宅医療専門クリニックに依存しており、多くの在支診は年間 1～2 件の看取りにとどまっている。在支診が診療規模を拡大できない主たる理由は、24 時間対応に対する医師一人あたりの負担が大きいこと、在宅医学管理の限界点が低いことなどが考えられている。在宅医療専門クリニックが休日・夜間の緊急対応及び重難度ケースへの診療支援を行うことで、地域の在支診が在宅医療への関与を拡大できるかを検証した。

方法
悠翔会在宅クリニックが診療圏の重複する 7 在支診（平均常勤医師数 1.24 人）と連携、診療内容を電子カルテで共有し、休日・夜間の緊急対応及び重難度ケースへの診療支援を行った。連携先の管理患者数・看取り数の推移に加え、連携医師、患者および関係する介護事業者に対し、アンケートによる満足度調査を実施した。

結果
連携する全ての在支診で管理患者数、看取り数ともに増加した（1 カ所あたり月間管理患者数 32.8 名増加、年間看取り数 5.6 名増加）。主治医以外の緊急対応への患者満足度は高く 83% の患者が良いと回答、看取りに対する不満も少なかった。介護事業者の評価は概ね患者満足度と同等であった。連携医師の満足度も高かった。

考察
多くの患者が望むのは、通院困難になってもこれまでの主治医が最期まで診てくれることだろう。地域の診療所がより積極的に在宅医療に取り組むことで、この願いが叶えられる患者が増えていく。在宅医療専門クリニックとの連携は、患者満足度を犠牲にすることなく、在宅医療に対する医師の負担を大幅に軽減し、地域の診療所が在宅医療により積極的に関与するための支援策となり得る。今後、相互補完しながら、各地域で積極的に連携を進めていくべきである。